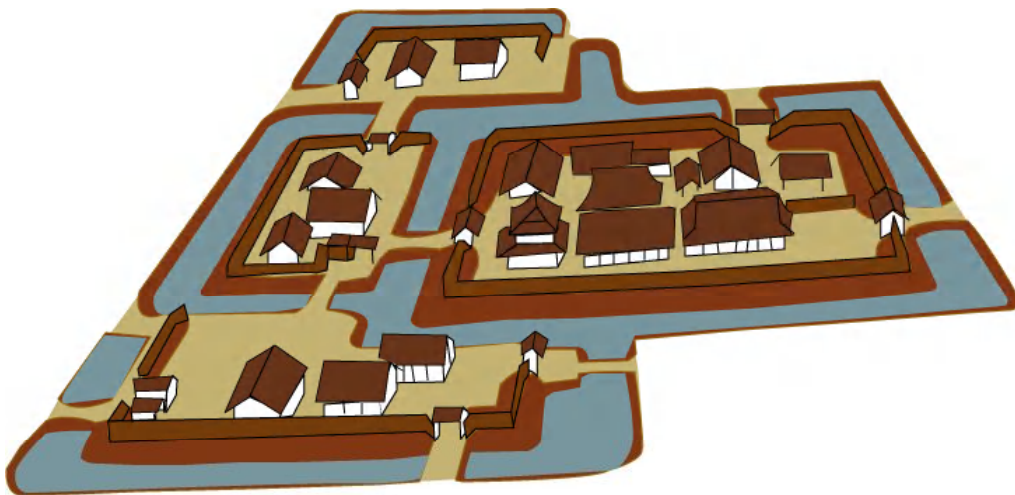


勝瑞館跡第11次発掘調査現地説明会資料



平成18年3月12日

藍住町教育委員会  
徳島県教育委員会



# 勝瑞館跡第11次発掘調査現地説明会資料

平成18年3月12日  
藍住町教育委員会  
徳島県教育委員会

## 1 調査場所

徳島県板野郡藍住町勝瑞字東勝地（勝瑞館跡）

## 2 調査期間

平成17年10月12日～平成18年3月12日

## 3 調査面積

1,000㎡

## 4 調査主体

藍住町教育委員会（協力：徳島県教育委員会）

## 5 調査の概要

### (1)はじめに

藍住町勝瑞は、吉野川水系によって形成された沖積平野にあります。室町時代後半に阿波守護細川氏により守護所が置かれた地で、守護所を中心とした守護町が形成されていました。戦国時代に細川氏に代わって阿波の実権を握った三好氏もまた勝瑞を本拠とし、畿内を中心に活躍しました。天正10(1582)年に土佐の長宗我部氏の侵攻を受け、三好氏が讃岐に撤退するまで、勝瑞は阿波の政治・経済・文化の中心地として栄えた町だったのです。

「勝瑞館跡」は、三好氏の館跡と推定される遺跡です。平成9年度からこれまでに10次にわたる調査が実施され、特に平成11・12年度の調査では、館の周囲を巡る大規模な濠、枯山水式庭園や会所等が発見されました。これにより、全体が1つの区画からなる方形の館である「勝瑞館跡」と、城郭である「勝瑞城跡」がセットになった遺跡「勝瑞城館跡」として、平成13年1月29日に国の史跡に指定されました。

### (2)調査の経緯と概要

昨年度の調査では、それまで館の中心部と考えられていた地点で大規模な濠跡が発見され、さらに今年度、館跡の東側に隣接する地点で国内最大級の池泉式庭園跡が確認されました。これらの発見により、平成13年度に館跡東側で発見された大規模な礎石建物跡が、主殿であった可能性が高くなるとともに、勝瑞館がいくつかの区画からなる、もっと大きな館であった可能性が高くなりました。

そこで今回の調査では、これまでに見つかっている濠のつながり方を調べることで、現在「勝瑞館跡」とされている区画と、その東隣にある大型礎石建物跡や池泉式庭園跡が見つかった区画との関係を明らかにするため、濠の合流点とみられる地点の調査を行いました。

### (3) 発見された遺構と遺物

今回の調査では、東側から平行に延びてきた2つの濠がそれぞれ南北に分かれていく様子と、その濠のコーナー部分には礎石建物跡があったことが明らかになりました。また年号入りの木製品や和歌を刻んだ硯など、貴重な文字資料を得ることもできました。出土遺物から考えられる遺構の構築年代は、16世紀後半とみられます。

#### 濠①

北側の濠です。東側から延びてきた上幅約4mの濠①は、調査区中央付近ではほぼ直角に北に曲がり、上幅10m以上の大きな濠となって北に延びていきます。肩の標高は南側では約1.7mですが、北ほど高くなり、調査区の北端では約2mです。

この濠①でも他の濠同様、下部に木製品を含む有機物粘土層が堆積しています。しかし、ここでは有機質粘土層の上に土を盛って濠の肩を作り直していることがわかりました。館の最終段階では、かなりの部分が埋まっていたこととなります。なお、そのころの深さは、肩から約1.7mほどだったと考えられます。

「永禄十年五月廿四日」銘の卒塔婆は、濠①の有機質粘土層から出土しました。これにより先に述べた肩の作り直しは、永禄10年5月24日以降に行われたということができます。

また今回の調査では、濠①の北側に延びる部分の西側の肩が確認できませんでした。しかしこれまでの調査で、東西方向の濠の延長上によく似た幅の濠が見つまっていることや、明治時代の地籍図にも水路が記載されていることなどから、西にも分岐して館北濠とつながることが想定されます。

#### 濠②

南側の濠です。濠②の北側の肩は、調査区の中を東から南へ向かって緩やかに弧を描くように曲がっていきます。コーナーには少しふくらみを持たせてあり、そこでは標高約0.6mのところ平坦面があります。平坦面は長さが約7mで、最も広いところの幅は約0.8mで凸レンズのような形をしています。平坦面の上では、肩に沿って約30～40cm大の大きな砂岩が並べられ、その内側に約10～20cm大の小さな砂岩が敷き詰められています。濠の南側の肩は、東側が水路と重なっていてよくわかりませんが、コーナーに方形の突出部を持ち、10次調査で検出した東濠の東肩へとつながっていきます。

肩の標高は両岸とも約1.6mで、法面は北側・西側が緩く、南側・東側が急勾配となっています。10次調査で東濠を検出した時にも、西肩が緩く東肩が急勾配だったことから、主殿のある曲輪の法面が急勾配となっている可能性が高いと考えられます。

濠②の幅は最も狭いところで約8m、広いところでは15m以上あります。深さはコーナーが最も浅く肩から約2m、周囲に行くほど深くなります。これは10次調査の東濠の幅約13m、深さ約3.5mより狭く、浅くなっています。

下部には、他の濠同様有機物粘土層がありました。羽子板や漆椀等たくさんの木製品が出土していますが、濠のコーナー付近からは特に多く出土しています。

#### 橋脚？

平坦面のすぐ南側で、2本の柱根が検出されました。標高は約10cmで、北側には直径約13cmの丸太が、南側には縦10cm、横5cmの角材が、それぞれ濠の肩に対して斜めに打ち込まれていました。上部の材が確認できていないため、詳しいことはわかりませんが、内側の

曲輪から方形の突出部が形成されていることや、濠の幅が最も狭い地点にあるという点から考えて、この柱根は橋脚だった可能性が高いと考えられます。2本の柱根に用いられている材の形が違うのは、もともと何かに使われていた材木を転用したからではないかと考えられます。

### 通路？

濠①と濠②の間には、濠に沿って非常に堅い高まりがあります。北側が濠①の南肩、南側は濠②の北肩になっています。幅は約3mほどですが、曲輪に接続するところではやや幅が広くなり、約5mほどあります。濠と濠の間を低いながらも掘り残し、その上に土を盛って突き固めて造ったと考えられ、上部は非常によく締まっています。上面の平坦面の標高は約1mで、濠①の北肩の標高約1.7m、濠②の南肩の標高や約1.6mに対してやや低くなっています。

10次調査で東濠・東西濠を確認した際にも、濠の間に同じような高まりを確認しました。またこの地点は、明治時代の地籍図上で国有里道（赤線）として標記されていて、近世以来、今でいう道路となっていたところudur。このことから、館があった頃にも通路として利用されていた可能性が考えられます。

### 礎石建物跡 (SB1001)

濠①の北側で見つかった礎石建物跡です。建物の方向は濠①と同じ方向で、礎石には40～50cm大の平たい砂岩が用いられています。調査区内では南北一間(約2m)、東西二間半(約5m)が検出されましたが、北側や東側にもう少し広がっている可能性もあります。なお柱間は、一間＝六尺五寸二分で約197cmです。

この建物の見つかった場所やその周囲には、焼けた土や壁土があつて、このあたりの建物が何度か火災にあつたことがわかります。

#### ※「一間」の長さについて

明治時代以前は一間の長さは決まっていなかった。そのため、一間の長さはいくらとその都度表示していたようです。

### 礎石建物跡 (SB1002)

濠②の南側の肩に造られた、東西約6m、南北約10mと推測される方形突出部の上で見つかった礎石建物跡です。二間(約4m)四方の規模を持ち、東西方向には半間おきに東石とみられる礎石が置かれています。礎石には20～30cm大の砂岩が多く用いられ、SB1001よりもやや小さめの石となっています。

この建物跡は、主殿とみられる大型礎石建物跡と同じ方向に建てられています。また見つかった地点もは、その建物跡や池泉式庭園跡の北西にあたることから、同じ曲輪内にあると考えられます。

### 「永禄十年五月廿四日」の年号入り卒塔婆

長さ56cm、幅5.5cm、厚さ1mmで、濠①の底に堆積する有機物粘土層より出土しました。卒塔婆は、現在ではお墓の後ろに立てられているのをよく見かけますが、古来より死者の供養のために川や海に流されることが多かったようです。この卒塔婆もその姿から流され

たものと考えられます。

下部に「永禄十年五月廿（にじゅう）四日」という日付がみられます。これは供養が行われた日を表していると考えられ、卒塔婆はその直後に流されたと考えられます。供養が行われた場所はわかりませんので、流れ着くのに多少の時間を要したことを考慮する必要がありますが、それでも出土した層の年代を裏付ける有効な資料です。

ちなみに永禄十年は西暦1567年にあたり、阿波の三好氏は長治の時代となっています。

### 和歌を刻んだ硯

縦8.4cm，横4.9cm，厚さ9mmの硯です。濠②の西側遺構面上から出土しました。裏側には縦1.8cm，横3.6cmの彫り込みがあり、「此□よ うき世 かな月 を□ か世・・・」という和歌が刻まれていて、その下に「これを正月十日 主とく丸殿 古松丸□（花押）」とありました。

「主とく丸」，「古松丸」という人名が見え、特に「古松丸」は武家が用いるような花押を用いていることから、それなりの地位の人であったことがわかります。

#### ※花押とは

花押は署名の代わりに自筆で墨書した一種の符号で、「書判（かきはん）」とも呼ばれます。花押の「押」は署名の意味で、文字通り「花のように優美に署名すること」です。文書の真実性を明らかにするのが目的で書かれました。

### (4) 現時点での調査のまとめ

勝瑞館跡の構造については、これまでにいくつかの疑問がありましたが、今回の調査では、それらに一定の答えを示す重要な成果が得られました。

平成15年度末の時点では、館跡は四方を濠で囲まれた1つの区画からなる方形の館（＝単郭方形館）と考えられていました。しかし平成16年度、単郭方形館で主殿が想定されていた地点での東西濠の発見（館跡10次調査）、館跡の東側隣接地での濠跡確認や国内最大級の池泉式庭園跡発見（東勝地地点7・8次調査）によって単郭方形館の想定が崩れ、いくつかの区画（＝曲輪）からなる大規模な館跡という可能性が高くなりました。ただこの時点では、濠のつながり方が明らかではなかったため、時代の違う館跡が、少しずつ場所をずらしていくつか存在するという可能性も否定できませんでした。

今回の調査では、

- i) 10次調査で確認した館の東濠が、北側から館の東隅で曲がって南へ延びる濠ではないことを確認しました。東から、すなわち勝瑞城跡の方から延びてくる濠が2つ見つかかり、一方は濠①で北に直角に曲がり、もう一方は濠②でこれが東濠につながるということがわかりました。
- ii) 濠②のコーナーの突出部とその上の礎石建物跡、橋脚の可能性のある柱根、濠の間に構築された通路状の高まりを確認しました。2つの曲輪が同時に存在したことを明らかにするとともに、曲輪同士の連絡ルート的一端が明らかになりました。

以上により、いくつかの曲輪からなる館であったことが明瞭になるとともに、その範囲は東へ広がり、館と勝瑞城が一体であった可能性も出てきました。

出土遺物では、種類の豊富な木製品や華南三彩など貴重な遺物が多数出土しましたが、中でも特に重要なのは、これまで少なかった文字資料が得られたということです。

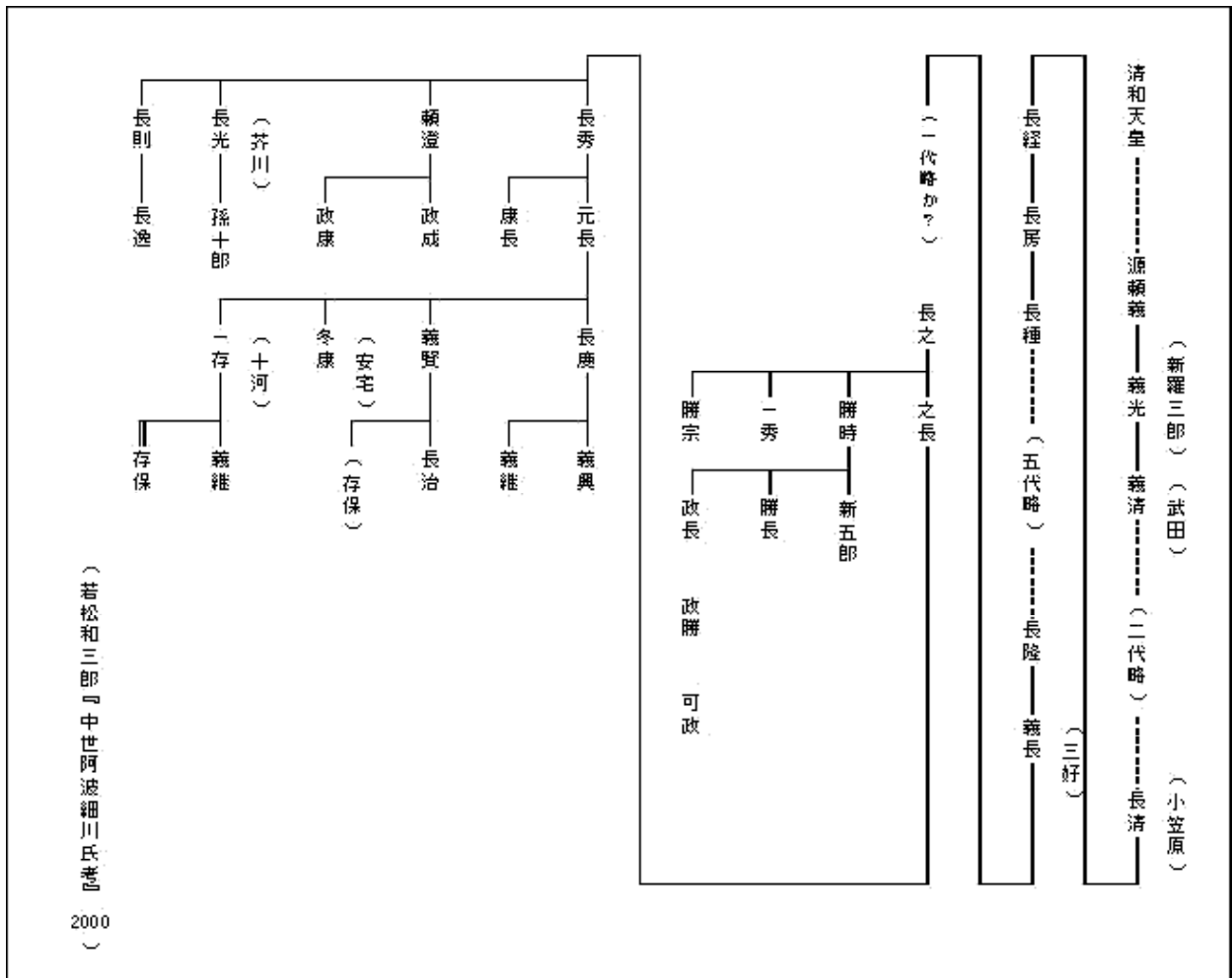
濠①から出土した卒塔婆に記されていた永禄十年という年号は、これまで用いてきた土器や陶磁器の年代観と一致しています。このことは、この場所が三好氏の館跡であることをより確実にするとともに、これまで用いてきた土器や陶磁器の年代観そのものの正しさを証明することにもなりました。

また和歌入りの硯には、これまでの文献史料にはない個人を特定する人名が記されていました。和歌が詠まれた背景は明らかではありませんが、そこには武家が用いるような花押も併せて刻まれていますので、「古松丸」がそれなりの地位を持つ人物であることがわかります。今後の調査の進展により、三好氏やその家臣団の構成、及びその社会的背景が明らかになることが期待されます。

以上が現時点までで明らかになったことです。

室町時代から戦国時代は、阿波の最も輝いた時代であったといっても過言ではありません。その一時代を築き上げた三好氏は、有力な戦国大名で、一時は畿内を制覇していた時期もありました。そして、文化人としても著名で、特に茶の湯の愛好家としてよく知られています。今後の調査の進展により、一流の武将であった三好氏の個性あふれる当時の勝瑞の様子が明らかになってくることでしょう。

今後は、本町としてもこの歴史遺産を保存・整備し、活用していくことを計画しています。今後ともご指導、ご協力の程、よろしくお願いいたします。





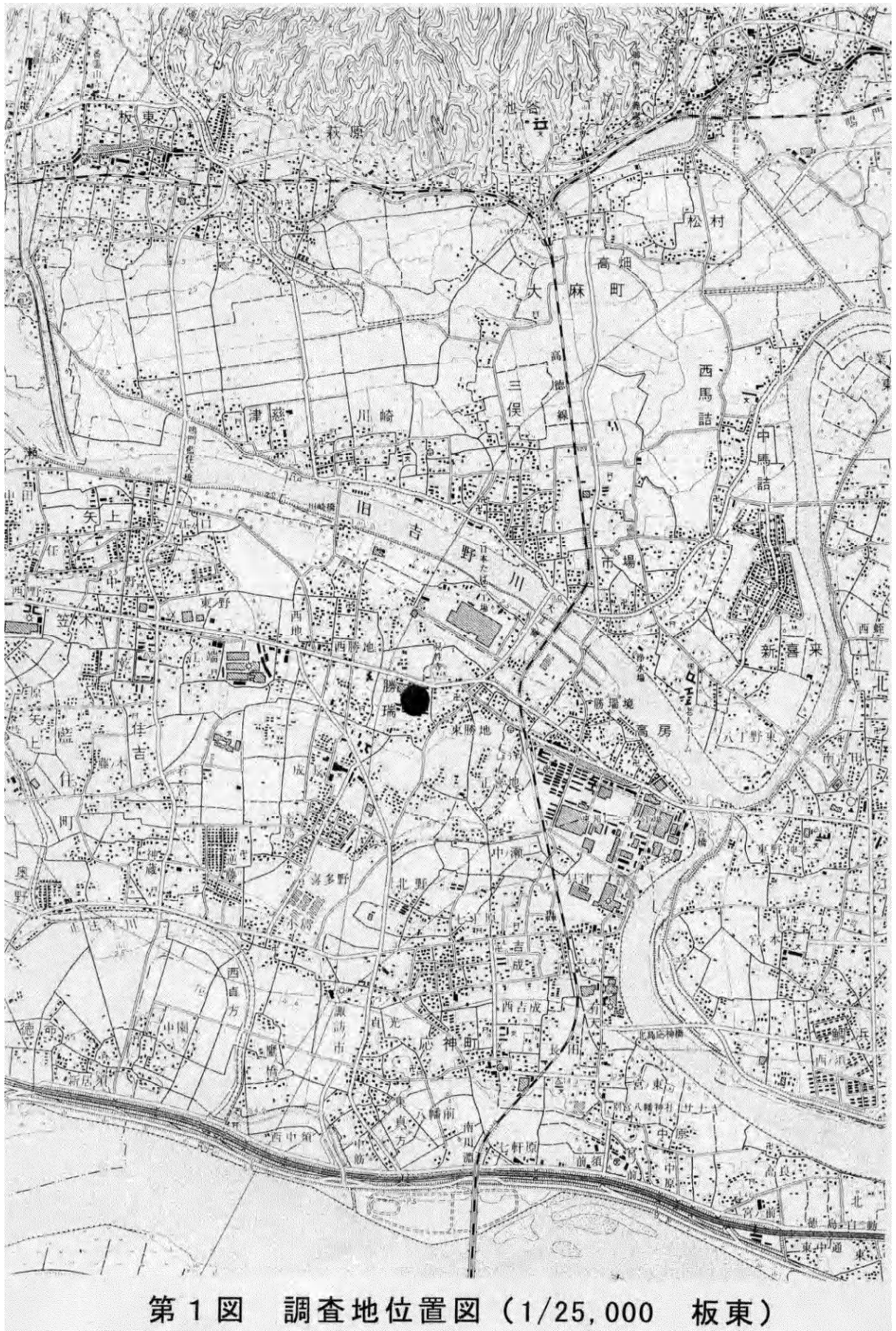


西暦	和暦	守護所	守護	細川氏・三好氏関係	一般	
1336	建武 3	秋月	和氏	2 足利尊氏の命により細川和氏・頼春兄弟、阿波に入る。	1338 3 足利尊氏、征夷大將軍となる。  1350 観応の擾乱はじまる。  1368 元滅亡。明成立。 1377 足利義満、花の御所に移る。	
1339	暦応 2			8 細川和氏、秋月荘に補陀寺を建立。開山、夢想疎石。		
1342	康永 1			9 細川和氏没(47歳)。補陀寺に葬る。		
1352	文和 1			閏2 守護細川頼春、京都四条大宮で戦死。		
1356	延文 1			3 細川頼有、備後国守護に就任。		
1363	貞治 2			2 守護細川頼之、秋月に光勝院を建立。開山、春屋妙葩。		
1367	6			9 守護細川頼之上洛。 11 細川頼之、管領就任。		
1379	康暦 1			閏4 将軍義満、細川頼之の管領職を罷免。 7 康暦の政変。細川頼之、四国へ下る。		
1385	至徳 2			7 細川頼之、秋月に宝冠寺を建立。開山、絶海中津。		
1391	明德 2			4 細川頼之上洛。 4 細川頼元、管領就任。		
1392	3			3 細川頼之没。		
1395	応永 2			8 細川頼之・細川義之・尼守格、秋月荘八幡宮へ鐘を寄進。		
1422	29			満久		2 守護細川義之没。
1430	永享 2	9 守護細川満久没。				
1434	6	9 守護細川持常、将軍義教より萱島荘管理の命を受ける。				
1441	嘉吉 1	6 嘉吉の乱。守護細川持常、赤松満祐討伐軍の大將となる。				
1447	文安 4	閏2 守護細川持常、桂林寺に法華經八卷を寄進。				
1449	宝徳 1	12 守護細川持常没。				
1462	寛正 3	成之	5 守護細川成之、管領代となる。			
1465	6		2 三好式部少輔、阿波三郡を支配する。			
1466	文正 1		6 三好入道某、東寺領の段銭を押領する。			
1467	応仁 1		5 守護細川成之、阿波・三河の兵を率いて東軍に加わる。			
1478	文明10		9 守護細川成之、嫡男政之に家督を譲る。			
1485	17	勝瑞	政之		1482 足利義政、銀閣寺造営。 8 山城国一揆。  12 加賀一向一揆	
1488	長享 2					8 三好之長、京都で土一揆の張本人として追捕の対象となる。
1489	延徳 1			10 阿波国内乱れる。細川成之・政之、京より急ぎ阿波へ下る。先陣三好氏、後陣河村氏。		
1494	明応 3			7 細川政之没。 8 青蓮院尊応、細川成之を勝瑞に訪ね、猿楽の秘事を聞く。		
1503	文亀 3			12 細川義春没。		
1506	永正 3			5 管領細川政元、細川成之の孫澄元を養子とする。 2 三好之長、細川澄元の先陣として上洛する。 4 細川澄元上洛。		
1507	4			6 管領細川政元暗殺される。(両細川の乱勃発)		
1508	5			8 細川澄元、管領細川家の家督を相続する。		
1509	6			4 細川高国上洛。細川澄元・三好之長、近江へ逃れる。 6 三好之長、如意嶽に細川高国と戦い敗れる。 8 三好之長、京都へ攻め上り、高国方と戦い敗れる。		
1511	8			3 足利義澄の子義維、守護細川之持に託される。 7 細川澄元・三好之長、阿波から兵を率いて上洛。 8 京都舟岡山合戦。細川澄元敗れて阿波へ帰る。		
1519	16			9 細川成之没。丈六寺に葬る。 5 三好之長、淡路守護細川尚春を暗殺。 9 細川澄元・三好之長、阿波にて挙兵。 11 細川澄元・三好之長、兵庫に上陸、越水城を包囲する。		
1520	17			2 三好之長、越水城を陥す。 3 三好之長上洛。細川高国、近江へ敗走。 5 三好之長、細川高国と戦い敗れる。三好之長、智恩寺に自害する。 6 細川澄元没。於、勝瑞。		
1522	大永 2			2 三好長慶、阿波で生まれる。		
1526	6	10 三好元長、細川晴元を擁して阿波にて挙兵。 12 細川澄賢、三好勝長らを先陣として堺に上陸。				

表1 阿波守護所関係年表 (No. 1)

西暦	和暦	守護所	守護	細川氏・三好氏関係	一般
1527		勝瑞		2 三好勝長ら、桂川の戦いで細川高国を破る。 3 細川持隆・三好元長、足利義維・細川晴元を擁して堺に上陸。堺幕府成立。	
1528				7 三好元長、山城下五郡守護代となり京都を支配する。	
1529	享禄 2			8 三好元長、細川晴元と不和になり阿波に帰国する。	
1531				2 三好元長、細川晴元の招きに応じて堺に上陸する。 3 細川持隆、軍勢を率いて堺に上陸する。	
				6 三好元長、摂津欠郡にて細川高国を破る。	
1532	天文 1			3 細川持隆、晴元と義絶して阿波に帰国する。 6 細川晴元、一向一揆と結び三好元長を堺の顕本寺に攻め滅ぼす。元長、顕本寺で自害する。	
				堺幕府滅びる。	
1533				6 三好長慶、本願寺と細川晴元との講和を仲介する。	
1534			持隆	10 三好長慶、細川晴元の被官となり、摂津守護代・越水城主に任せられる。 この年、守護細川持隆、足利義維（義冬）を阿波平島へ迎え入れる。	
				守護細川持隆、丈六寺に瑠璃殿建立。	
1537				1 三好長慶上洛する。	
1539				6 三好長慶、幕府に河内17箇所を要求し、容れられず叛乱を起こす。	
1540				8 三好長慶、越水城主となる。	
1542				3 三好長慶、河内太平寺で木沢長政と戦い、これを滅ぼす。	1543 8 鉄砲伝来。
1546				8 三好長慶、堺で細川氏綱と戦い敗れる。 10 細川持隆・三好義賢、兵を率いて堺に上陸する。	
1549				6 十河一存、摂津江口にて三好政長を敗死させる。晴元政権崩壊。 7 三好長慶、細川氏綱を擁し入京。	7 キリスト教伝来。
1550				7 三好長慶、將軍足利義輝と洛東で戦う。	
1552				1 三好長慶、將軍義輝と和睦し、御供衆となる。	
				8 守護細川持隆、三好義賢に自害に迫り込まれる。	
1553			真之	8 三好長慶、芥川孫十郎を滅ぼし芥川城に入る。	1555 7 川中島の合戦。 5 桶狭間の戦い。
1560	永禄 3			5 三好長慶、飯盛城に入り、三好義賢、高屋城に入る。	
1562				3 三好義賢、和田久米田の戦いで敗死。	
1564				5 安宅冬康、飯盛城にて誅殺される。 7 三好長慶没。	
1566				6 篠原長房、足利義榮を擁して兵庫に上陸する。	
1568				10 篠原長房、細川真之・三好長治を伴って阿波へ帰る。	1571 9 織田信長、延暦寺を焼き討ち
1572	元亀 3			7 篠原長房、上桜合戦にて戦死する。	1573 7 室町幕府滅亡。
1575	天正 3			9 長宗我部元親、海部城を陥れる。	
1576				12 守護細川真之、密かに仁宇谷へ逃れる。 この年、池田白地城主大西覚養、長宗我部元親に降る。	
1577				3 三好長治、守護細川真之を攻めるために荒田野に出陣するが、一宮成祐・伊沢頼俊に攻められて長原で自害。 4 長宗我部元親、田尾城を攻略し、白地城に入る。	
				11 日和佐城主日和佐肥後守、長宗我部元親に降る。	
1578				1 三好存保、勝瑞に入る。 5 三好存保、重清城を奪還し、大西覚養を殺害する。	
				6 三好存保、重清合戦にて敗れる。	
1579				12 三好徳太郎、勝瑞の重臣矢野駿河守、森飛驒守、三好越後守等を誅殺する。 この年、新開道善、長宗我部元親に降る。	5 安土城天守完成。
1580				1 三好存保、讃岐へ退去。	
				8 木津城主篠原自遁、長宗我部元親に降る。	
1581				7 三好存保、勝瑞へ入る。	
1582				5 三好康長、織田信長の四国征伐軍の先陣として阿波へ攻め入る。 6 三好康長、本能寺の変のため急ぎ上洛する。 8 三好存保、中富川の合戦で長宗我部元親に大敗し、勝瑞籠城。 9 三好存保、讃岐へ退き、勝瑞開城。 10 細川真之、仁宇山で自害。	6 本能寺の変

表2 阿波守護所関係年表 (No. 2)



第 1 図 調査地位置図 (1/25,000 板東)